

絶滅危惧 植物図鑑

稀少な個性派
セレクション

ながさわ じゅんいち
長澤 淳一
京都府立植物園

和名	アマミアセビ
学名	<i>Pieris amamioshimensis</i>
科・属名	ツツジ科アセビ属
開花期	2～3月
分布	鹿児島県
危惧種ランク	絶滅危惧ⅠA類 (CR)

※ⅠA類 (CR) : ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
ⅠB類 (EN) : ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
Ⅱ類 (VU) : 絶滅の危険が増大している種

No.10

アマミアセビ



奄美大島の湯湾岳、慈和岳（標高682m）の山頂付近に群落をつくって自生していたアマミアセビ。1cmほどの花をたくさんつける。葉は葉幅が広く肉厚で、耐乾性、耐光性に優れる。



沖縄県国頭村安波のタナガームイ（標高約100m）の川岸岩上に自生していたリュウキュウアセビ。葉が細く、溪流沿い植物の特徴を示す。

上がアマミアセビで、下がリュウキュウアセビ。アマミアセビの方が花冠が大きく肉厚で、白さが際立つ。



今世紀に入ってから新たに認められた種

アマミアセビは発見された時、沖縄県に産するリュウキュウアセビと同じと判断されました。後に詳細な調査に基づき別の種であるとの見解が示されましたが広く認知されるまでは至らず、環境省のレッドリストでも従来のままリュウキュウアセビとして取り扱われています。その経過は次の通りです。1963年に鹿児島大学の学生であった追静男氏によって奄美大島の慈和岳山頂付近の岩上でアセビが発見されました。そのアセビは1930年に記載されていたリュウキュウアセビと同じであると、初島住彦教授により判断されました。ところが詳細に比較すると、沖縄産が川沿いに自生し、葉が細く溪流沿い植物

の特徴を示すのに対し、奄美産は山頂の強光や乾燥に耐えるよう葉幅が広く肉厚で、花も大きめです。さらに葉緑体のDNAを比べると、奄美産の個体はある特定部位の塩基が欠落することが判明したため、2010年に京都大学の瀬戸口浩彰教授らによってリュウキュウアセビとは異なる新種、アマミアセビの名が生まれました。どちらも園芸目的の採取により野生状態で生存株はほとんど残っていません。アマミアセビは自生地ではほとんど消滅したものの民家や植物園、園芸業者に残っているものがあり、京都府立植物園は瀬戸口教授とともにそのような個体を探し出しました。そして挿し穂を譲り受け、系統保存を行い、普及と保全活動の啓発をするために植物園で殖やした個体を奄美大島の小中学校などに植栽する活動を続けています。

※川沿いや岩の上で生活し、普段は水につからないが、大雨で川が増水した時などに水をかぶるような場所に生育する植物。水圧に耐えられるよう流線形に近い葉をもち、植物体が圧力を受け流すようにできているのが特徴。